

●毎日新聞の記事より紹介。

夕方山城大橋付近の竹藪を散歩していると全く静かでやかましいほど騒いでいたスズメのさえずりが全く聞こえなくなりました。騒がしさのなかで夕方を知ったものです。通るたびにその声を

聞いて小さいころ「したきりスズメ」のお宿のおとぎ話を父から聞かされて眠りについたこと、なつかしい子供の頃を思い出させてくれました。また中学生の頃には障子を担いで木津川で洗って乾かして障子紙をさんに糊りをつけて障子紙(和紙)を張って口に水を含んで霧吹きをしまっさらになったように感じさせられ素晴らしい部屋になったことをなつかしい思い出がよみがえります。そのスズメが温暖化の影響で減少していると報道されて非常に寂しく感じます。温暖化の影響だと報道しています。また早苗が植えられた田圃ではツバメがすいすいと飛んでいる風景も見かけることが少なくなってきているように思います。農薬で餌の虫の繁茂も抑え込まれているからでしょうか。日本で有数のツバメの寝床としている宇治川の観月橋の下流のヨシ原に集まってくるものも数が少なくなってきているように感じます。

●アライグマ対策学習会 12月12日予定
里山の会では夏に3匹を捕獲しましたがその後も親子で行動する写真が撮影されました。周辺に多くが生息しているようです。アライグマでの農作物被害が頻発しています。環境庁や研究者から対策や防御策の学習会を開催しますのでご参加を呼びかけさせていただきました。京田辺市立中央公民館を予定しています。

〔第3〕 14版 2024年(令和6年)10月2日(水)



①里山で個体数が減少しているスズメ、モントラサキ、オオムラサキの調査に参加した佐藤良平さん提供
②オオムラサキの調査に参加した高橋正一さん提供

里山の鳥・チョウ急減

環境省と日本自然保護協会は1日、国内各地で動植物の状況を定点観測した結果、里山に生息する鳥類の15%、チョウ類の33%で個体数が年3・5%以上のペースで減っているとの報告書を公表した。この減少ペースが長期間続けば、スズメなどの身近な鳥やチョウが環境省レッドリストの絶滅危惧種の判定基準を満たす可能性があるという。

環境省など報告書

環境省などは2003年度から、全国のボランティアの協力を得て、国内1000カ所で生態系の変化を調査する事業「モニタリングサイト1000」を

オオムラサキ年10.4%

環境省によると、地球温暖化で生存に適した気温ではなくなったことや、管理されなくなった里山が増えて生息環境が変わったことが背景にあるとみられる。調査に助言などをする専門家委員の石井実・大阪府立大名

スズメ3.6% 温暖化影響

善教授(昆虫生態学)は「深刻な結果だ。全国規模で里山の自然環境が変貌している」と話す。里山以外でも気候変動の影響とみられる変化が表れている。全国的に南方系のチョウが増加し、暖かい気候を好む樹木が増える影響も深刻だという。シギやチドリなど内陸の湿地や沿岸域に生息する鳥類が10年間で半減し、鳥しょ部ではカモメ類が大きく個体数を減らしたことが分かった。

日本自然保護協会は調査結果を受け、生物多様性の回復に向け、モニタリング体制の強化とともに、地域で環境保全を進めるために「官民の支援の充実が求められる」などとする提言を公表した。

適切に管理されず、荒廃した里山
|| 岐阜市内で(同調査に参加した佐藤良平さん提供)

【山口智】

●10月5日(土) 10:00 から植物部会が開催され 20人ほどの皆さんが普賢寺小学校前に集合。



今回は有地淑羽さんからご一緒に取り組めないだろうか、京田辺市環境パートナーシップの仲間が参加させてほしいと呼びかけてこられ、これまでになく大勢のグループになりました。ガイドをお願いした光田先生は9月末に現地を下見して資料を提供され、この日ご案内をいただきました。里山農園ではフジバカマが満開で、ヒヨドリバナにはアサギマダラが飛んできていて皆さん大変感激された様子でした。皆さん健脚で元気に歩き回り沢山の植物を

観察されました。観察確認できた植物はタコノアシやマツカサススキ、ヤナギイノコズチなどでした。いただきました感想文を紹介します。

始めてきた場所でしたので、興味深く、見どころ沢山の、時間があつという間に過ぎて行きました。皆さんも良い方ばかりで、いろいろ教えて頂きました。先生のお話も竹の会からですが、聞きこぼすのが勿体ないくらいで勉強になりました。無理のないように機会があったら参加させていただきます。本当にありがとうございました。



木村さん撮影

今日はありがとうございました。アサギマダラを見る事が出来ました。貴重な植物への理解が深まりました。里山の管理大変ですが頑張ってください。

●里山農園も実りの秋を迎えています。

柿や栗の実が沢山つきました。それぞれ5年から7年が経過して、ことわざにあるように「桃栗三年柿八年 梅は酸い酸い十三年 梨はゆるゆる十五年 柚子の大馬鹿十八年 みかんのマヌケは二十年」とあるように本格的に果樹に実がなるようになりました。ここではイノシシに随分サツマイモが全滅させられて里山農園の周囲に侵入防止の鉄柵を張り巡らしてきましたが、近ごろはアライグマの侵入に悩まされています。樹木地面から上の果実は鳥による被害を考えなくてはならないのではないのでしょうか。常に明日収穫しようと準備していると直前に被害によって無収穫となることいくども経験してきました。実った収穫できると喜んでばかりいられないところが大変厳しい苦労が待っています。被害防止にご協力ください。(金田さん撮影)



●子ども魚釣り大会 10月6日(日)

スタッフ集合8時とされていた木津川の玉水浜で国の天然記念物と指定されているイタセンパラの復活を目指す「第二回子ども魚釣り大会」が開催されました。この取り組みは10年前から里山の会は調査観察を始めてきたもので、絶滅されたとされる直前まで自然の



なかで生き残っていた場所が、そのままの環境が残されていることが判明して取り組みをはじめました。残されたワンドの肉食魚、外来魚ブルーギルやブラックバスなどを駆除することを大きな目標として第二回目の子ども魚釣り大会を実施いたしました。参加募集したところ枚方市や奈良市内からも17家族64名の参加がありました。去年の経験を活かして均一の道具で釣っていただくことが必要だろうと主催者で子ども用の釣竿40本を用意しました。



キイロヤマトンボのヤゴ



そして安心して釣れるように用具のトラブルに対応できる講習会を開催して技術指導が出来るように受け入れ態勢(6ブロックに指導者7人とサブ6人を整える事が出来ました)。

前回の教訓からワンドの周りでの大声や激しい行動の自粛の必要性を参加者はもちろんスタッフが率先して実行するように強調しました。この日の成果物(吊り上げた獲物)は、外来魚(ブルーギル22匹・オオクチバス14匹・コクチバス2匹)という成果でした。そのほかにキイロヤマトンボのヤゴ(絶滅危惧種)4匹が捕獲され木津川のすばらしさが証明されました。スタッフが会場に到着する前からこのワンドでヘラブナ釣りをされている人がおられました。お話では5~6人ほどのグループでここで釣りを楽しんでおられるとのこと。取組をお話して納得していただく事が出来ました。もし地元の方のサークルであったらお力を貸していただけると感じました。お話を伺っていただいた矢放さんありがとうございました。

●竹蛇籠製作講習会

1回目 11月17日(日)、2回目 11月24日(日) いずれも10時開始です。

9月28・29日のいきものフェス(京都植物園)の竹蛇籠製作講習会で4本の頭部を編むことができました。それを使って6mのものに仕上げる講習会を11月17日と24日11時から開催を予定していますので魚の住処を作って魚に優しい川づくりを目指していく取組にご参加をお願いいたします。場所は玉水橋東詰のカルバートのところです。

●木津川希少種植生調査 除草作業

基本的に10月から11月の毎週水木曜日の13:30から作業を実施しますのでご協力ください。そして12月中旬に刈草の収集作業を計画しています。去年は同志社大学サッカー部の皆さんには大変お世話を頂きました。今年も変わらずお願いできれば有難いと思っています。

前日当日雨天の場合は中止、実施場所も加茂町から八幡市までありますので、問い合わせの上ご確認をお願い致します。



アライグマ 畑も生態系も食い荒らす

マングースの教訓



中

7月、熊本市の金峰山では、車道からほど近い沢沿いに、市が委託した業者がカメラを設置していた。「昨年、この下流でアライグマが見つかった。沢が移動経路になっている可能性がある」

熊本県でのアライグマ初確認は2010年。以来、目撃や捕獲が増え、23年度には110匹が確認された。市は「被害が拡大する前に対策を開始することが重要」として17年度から生息状況調査を始めた。21年度からは近隣の自治体と移動

状況も含めて調べている。県によると、九州では福岡や佐賀など北部で生息密度が高く、熊本への侵入は隣の福岡や大分などからとみられる。スイカの被害なども徐々に出てきた。この春、初めての防除計画をつくった。

アライグマは北米原産で、日本ではペットなどの個体が飼いきれずに放されたり、逃げ出したりして野生化。05年には特定外来生物にもなった。いまやほとんどの都道府県で見られる。

雑食性で、絶滅危惧種の両生類など、日本の生態系に対する悪影響が大きい。農業被害額も増加傾向で、農林水産省によると、22年度には約4億6千万円に上った。埼玉県などでは、シカやイノシシの被害を上回る。

マダニや病原体も運ぶ。重症熱性血小板減少症候群（SFTS）や日本紅斑熱など、人間もかかり致死率の高い感染症を媒介する。

森林総合研究所野生動物研究領域の土井寛大さんらは今年、神奈川県三浦半島での調査結果を論文として発表。それによれば、外来哺乳類のハクビシンに比べて、アライグマはかなり多くのマダニを運んでいた。3千匹も付けた個体もいた。



アライグマの被害にあったスイカ。中身だけを器用に食べる
北海道美幌市農政課提供